

小学校教育実習における現状と展望

— アンケート調査を中心に —

福田 啓子, 真田 洋子

(平成 18 年 10 月 5 日受理)

Teaching Practice of Elementary School, Today and Future

— Based on Survery —

FUKUDA, Keiko SANADA, Yoko

(Received on October 5, 2006)

キーワード：小学校教育実習、教員養成、実習指導
Key words : Teaching Practitce, teacher rtraining

はじめに

小学校教育現場では、「学力低下」の改善，教科教育の「基礎・基本」の充実，「総合的学習の時間」の活用，教科書の内容検討など，様々な角度から，そのあり方が問われている。さらに，変化する社会と子どもへの対応など解決すべき問題は山積している。小学校教員養成校においても，教育課程の改定を受け，カリキュラム等の見直し，教科教育法の内容充実を基に，子どもにとって「楽しい授業」が実現できる，「力のある教師」の養成が課せられている。

教員養成過程における教育実習の占める役割は，頗る重要であることはいうまでもない。大学での理論研究を実証研究することにより，学校現場の現実的な姿を学び，さらに，学生の自己発見，将来の進路決定へのターニングポイントともなり得る貴重な体験である。そして，この教育実習が，より効果的に行われるためには，小学校の協力はもとより，大学での実習事前事後指導の充実が図られなければならない。

本研究は，教育実習指導の充実した内容と方法を提示することを目的とし，今回は，その一環として学生の教育実習終了後に行ったアンケート結果を中心に検討する。

本学の家政学部児童教育専攻では，小学校教諭一種の免許状と幼稚園教諭一種の免許状を取得できる。同専攻

の学生の大半は，小学校一種の免許状取得を希望し，小学校実習を体験する。しかしながら，本専攻を選択したものの，小学校教諭に就くことを志望している学生の他幼稚園教諭を志望している学生，一般企業に就職することを考えている学生，進路に関して迷っている学生もいる。そこで，これらの学生が，教員免許を取得する上で重要な役割をもつ教育実習を通して，どのような思いや感想を持ったかを分析することにより，現在の小学校教育現場や教育背景を把握し，今後の実習指導充実に向けての示唆を得たい。

I 調査方法

1) 対象

本学児童学科児童教育専攻4年生，小学校教員免許状取得履修者219名

(平成16年度79名，17年度61名，18年度79名)

2) 実習期間

平成16年度：5月17日(月)～6月15日(火)

平成17年度：5月16日(月)～6月14日(火)

平成18年度：5月15日(月)～6月13日(火)

3) 実施期間

各年度とも教育実習終了後 6月末～7月中旬

4) 内容

実習後の「教育実習指導(小)」において、アンケート用紙を配布し、7月中旬に回収した。

調査内容は、以下の通りである。

問1.教育実習を体験して、どのような感想を抱いたか

- ① 児童について
- ② 実地授業と研究授業について
- ③ 小学校の組織運営と教員の職務について

問2《教育実習の全期間を通して》辛かったことや困ったことの有無

問3《教育実習の全期間を通して》最も印象に残った出来事

問4《実習前と比較して》自分の価値観の変化の有無(教育観, 児童観, 教師観等)

問5《実習前と比較して》将来進むべき道に対する考えの変化

問6「教育実習(小)」の講義に対する要望や意見

現場に加わることができる」②「たくさん子どもたちに出会える」③「自分の母校で実習ができる」というものであった。ここでは、これらの結果を参考に、実習後の調査結果をみていく。

1 教育実習体験の感想について

表1, 表2, 図1は、問1の教育実習を体験しての感想を項目ごとに分類し、年度別に人数と割合を示したものである。

①児童について

全体的には、子どもはa「素直」であったことが最も多く(42.5%), 次いで、c「元気」(23.3%), d「かわいい」(21.0%)ということに代表される。「クラスの子どもたちは、みんな人なつこかった」、「いつも元気一杯で明るかった」、「子どもたちから、パワーをもらった」などの記述がみられ、実際に接した子どもたちは、実習前に想像していたより、純粋でかわいい存在だということを感じとっている。g「幼い」(11.9%)では、「大人びた子どもが多いと思っていたが、実際は幼くてとてもかわかった」などの記述が比較的多くみられた。

また、f「個性豊かである」、h「様々な家庭環境」では、「子ども一人一人、個性があり、その子どもにあった接し方をしなければならないと思った」「家庭環境や育った背景が違うので、それらを知った上で接したり、言葉かけをすることが大切だと思った」など、関わり方の難しさも感じていたようだ。特に17年度では、高い値を示している。

II 結果および考察

実習事前指導において「実習に向けて不安なこと」と「実習に向けて楽しみなこと」という二つの観点からそれぞれの正直な気持ちを記述させた(18年度)。その内容は、不安なことは①「自分に授業ができるのか」②「先生たちとの人間関係は良好に進められるのか」③「子どもたちは自分を受け入れてくれるのか」という3点に集約され、また、楽しみなことは①「小学校教育の

表1 児童について

学生回答	平成16年度	平成17年度	平成18年度	合計
a. 素直	24 (30.4%)	18 (29.5%)	51 (64.6%)	93 (42.5%)
b. 明るい	10 (12.7%)	19 (31.1%)	12 (15.2%)	41 (18.7%)
c. 元気	12 (15.2%)	20 (32.8%)	19 (24.1%)	51 (23.3%)
d. かわいい	20 (25.3%)	6 (9.8%)	20 (25.3%)	46 (21.0%)
e. やさしい	6 (7.6%)	9 (14.8%)	7 (8.9%)	22 (10.0%)
f. 個性豊かである	4 (5.1%)	14 (23.0%)	9 (11.4%)	27 (12.3%)
g. 幼い	4 (5.1%)	10 (16.4%)	12 (15.2%)	26 (11.9%)
h. 様々な家庭環境を抱えている	1 (1.3%)	14 (23.0%)	8 (10.1%)	23 (10.5%)
i. 塾や習い事に追われている	0	2 (3.3%)	2 (2.5%)	4 (1.8%)
j. 昔と変わっていない	1 (1.3%)	5 (8.2%)	10 (12.7%)	16 (7.3%)

表2 実地授業と研究授業

学生回答	平成16年度	平成17年度	平成18年度	合計
a. 教材研究の大切さ	16 (20.3%)	17 (27.9%)	15 (19%)	48 (21.9%)
b. 教材研究の難しさ	5 (16.3%)	6 (9.8%)	4 (5.1%)	15 (6.8%)
c. 児童理解の大切さ	20 (25.3%)	26 (42.6%)	10 (12.7%)	56 (25.6%)
d. 児童理解の難しさ	4 (5.1%)	20 (32.8%)	5 (6.3%)	29 (13.2%)
e. 発問の難しさ	9 (11.4%)	10 (16.4%)	6 (7.6%)	25 (11.4%)
f. 板書の難しさ	3 (3.8%)	5 (8.2%)	3 (3.8%)	11 (5.0%)
g. 授業をする難しさ	8 (10.1%)	9 (14.8%)	12 (15.2%)	29 (13.2%)
h. 時間配分	4 (5.1%)	3 (4.9%)	5 (6.3%)	12 (5.5%)
i. ねらいの設定の大切さ	1 (1.3%)	5 (8.2%)	3 (3.8%)	9 (4.1%)
j. 子どもに支えられた	10 (12.7%)	12 (19.7%)	14 (17.7%)	36 (16.4%)

②実地授業と研究授業について

各年度ともc「児童理解の大切さ」を多くの学生が感じている。「1人で、30人以上の子どもたちをみるのだが、進み具合に個人差があるため、個別指導が大変だった」「子どもの実態に合わせて授業計画をたてなければならなかった」「最初は、授業を進めることが精一杯だったが、だんだん子どもの反応をみながら授業ができるようになった」など、授業の進行や方法は、まず子どもを知ることが大切だと痛感している。

次に、b「教材研究の大切さ」(21.9%)が、多くみられたが、実際に授業を行うということは、自ら各時間のねらいを設定し、それに伴った指導案を作成するなど、多くの時間や労力を必要とすることを改めて理解したことがわかる。

g「授業をする難しさ」(13.2%)では、「教える立場の大変さを知った。どう説明したらわかりやすいかを子どもの立場になって考えることが大切だと感じた」など、技術面では、e「発問の難しさ」(11.4%)、f「板書する難しさ」(5.0%)、h「時間配分」(5.5%)があげられている。しかし、授業を難しいものと捉えてはいるが、「楽しかった」といった記述が多く、授業を行う苦痛さを訴える回答は、一人もいなかった。また、i「子どもに支えられた」(16.4%)は、教師として初めての授業を、実習生として精一杯行ない、十分に子どもたちを惹きつけるものであったと推測される。

③組織運営と教員の職務について

図1は、実習生が、指導教官や校内の教師と関わって抱いた感想を示したものである。ここでは、a「教師の多忙さ」が多くみられ、18年度では、急増している。教師は、子どもと関わる時間以外にもたくさんの公務分掌に追われている姿が印象的だったようだ。例年、実習後に行われる実習報告会でも「こんなに教師が忙しいとは思わなかった」という声を多数耳にする。そして、「忙しすぎて、休み時間に子どもと遊ぶ教師がほとんどいなかった」と言う学生も少なくない。c「さまざまな役割や役割」も多いと感じ、現実の小学校教育現場は、あまりにも忙しいことに驚きを感じたようだ。また、b(地域連携)では、「学校と地域の結びつきがとてつよく、地域の方々が協力的で、地域全体で学校を運営しているように感じた」など、開かれた学校を実践している学校が多かったこともうかがわれる。それに伴い、f

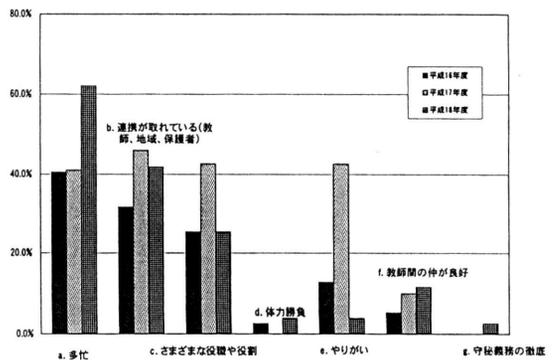


図1 組織運営と教員の職務について

「教師間のつながり」も年々増加し、「全教員で全児童を見守り、育てているということが伝わってきた」「先生方の団結はとても強かった」という記述も見過ごせないものである。しかし、e「やりがい」では、17年度では、高い値を占めていたものの、18年度では、急激に減少している。「組織運営の教員の負担が大きすぎる」「忙しすぎて、割りに合わない職業だと思った」などは、現在の教師の職務の忙しさなどとあわせ、問題を残す結果であろう。

2 辛かったことや困ったことについて

図2に示すように、3年間では、「困ったことはなかった」が41.0%、「あった」が59.0%を占めている。内容別にみると、①身体的に関しては、「指導案や教材作りで寝不足だった」「慣れなくて気疲れした」「疲れ気味」、②人間関係に関しては、「雑用などこままで手伝ったらいいかわからなかった」「教員志望ではないのに実習を受けてもらったこと」、③「授業」に関しては、「子どもの予想もしない反応に戸惑った」「学力の差が厳しく対応に悩んだ」、④子どもに関しては、「友達同士のトラブルの対応」「子どもと一線をひくことができなかった」などが挙げられる。

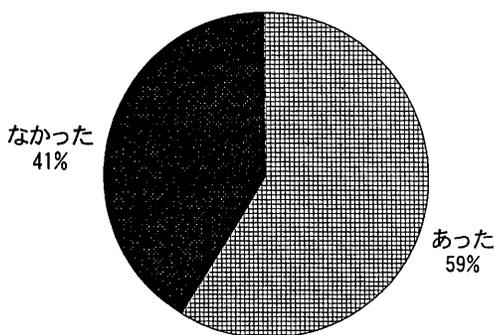


図2 辛かったことや困ったこと

特に問題視する内容は見当たらなかったが、わずかながらも、LDやADHDの子どもに対する対応が増加傾向にあることは、注目される。ちなみに、東京都の場合、小学校の通常の学級に在籍しながら通級指導学級で特別な指導を受ける児童は、平成16年度は4033名であり前年度に比べて435名(12%)増加している。平成5年度の通級学級の在籍者が2107名であったことに比べ、在籍者は1.9倍になっている。また、文部省の学校基本調査によると、およそ1学級に1名の割合でLDや

ADHDや高機能自閉症と診断された(またはおそれのある)児童が在籍している。今後、実習生としても、これらの知識や理解、それに伴う関わり方を身につけて実習に臨むことが必要になってくるだろう。

3 印象に残った出来事について

全年度を通して、全員が「あった」と回答し、その内容は、a「子どもたちの日々の姿(表情・言葉)」(55.3%)が最も多かった。低年齢の問題行動などが社会で取り上げられている現在、想像していた以上に、子どもたちは、笑顔が多く、態度や行動のかわいさや無邪気さに安心するとともに、心を動かされたようである。

同様に、e「子どもたちと過ごした時間のすべて」(21.9%)では、「毎日、同じということがなく、日に日に子どもと通い会っていった」などに代表され、学生と子どもとの関わりが充実したものであったことがうかがわれる。b「授業」(26.9%)では、「研究授業に向けて毎日頑張ったので、当日終わった時の感動が心に残っている」「授業の後、子どもたちが楽しかったよと言ってくれた」、さらに、c「お別れ会」(26.0%)では、特にその印象が強烈であり、「送る会を気付かれぬように準備してきてくれて、当日は号泣でした」「ひとりひとりが書いてくれた手紙をもらったことは、大切な思い出です」など、4週間の実習の日々は、忘れられない出来事であったことが推測される。

4 価値観の変化の有無について

表4は、実習前と比較して、教育観・児童観・教師観などの変化の有無を各年度別に表したものであり、図3は、全体の割合を図化したものである。a「あった」(73.0%)と回答した内容では、児童観や教師観では「想像していた以上に子どもは、小さくて、かわいくて、そして、時にはしっかりしている」、「教師は、子どもといつも接して、授業をすることが仕事だと思っていたが、あまりに教師の仕事が忙しいのに驚いた」など、先の「問1 教育実習を通しての感想」とほぼ同じであった。教育観については、「授業の重要性を実感した。どんなに熱心さを持っていてもしっかり授業ができないと意味がない」「知識や技術、教養も大切だけど、その前に人間として子どもとともに成長していく姿勢が大切だとわかった」「叱ることの必要性」と「ほめることの大切さ」などの変化があげられてる。

表3 最も印象に残ったこと

学生回答	平成16年度	平成17年度	平成18年度	合計
a. 子どもたちの日々の姿(表情、言葉)	37 (46.8%)	31 (50.8%)	53 (67.1%)	121 (55.3%)
b. 授業(研究授業も含める)	17 (21.5%)	15 (24.6%)	27 (34.1%)	59 (26.9%)
c. お別れ会(歌、手紙、涙)	22 (27.8%)	14 (23.0%)	21 (26.6%)	57 (26.0%)
d. お別れ会以外の行事	11 (13.9%)	10 (16.4%)	17 (21.5%)	38 (48.1%)
e. 子どもたちと過ごした時間すべて	17 (21.5%)	17 (27.9%)	14 (17.7%)	48 (21.9%)
f. 子どもたちと遊んだ時間	4 (5.0%)	13 (21.3%)	9 (11.4%)	26 (11.8%)
g. 子どもの成長	15 (19.0%)	10 (16.4%)	9 (11.4%)	34 (15.5%)
h. 指導教官との出会い	2 (2.5%)	1 (1.6%)	8 (10.1%)	11 (13.9%)

表4 価値観の変化

学生回答	平成16年度	平成17年度	平成18年度	合計
あった	50 (63.3%)	47 (77.0%)	63 (79.7%)	160 (73.0%)
なかった	29 (36.7%)	14 (23.0%)	16 (20.3%)	59 (27.0%)

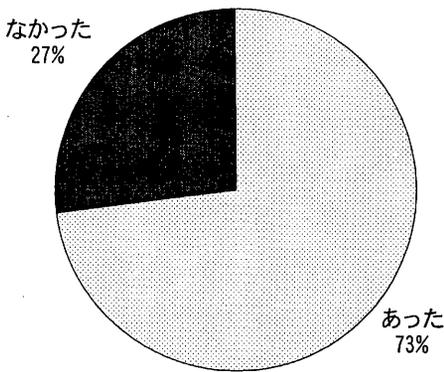


図3 価値観の有無

5 進路に対する変化について

図4は、教育実習前と比較して、「教師」に対する気持ちがどのように変化したかを示したものであり、図5は教員志望の割合を示したものである。

ここでは、a「教師になりたい気持ちが一層高まった」が(47%)、約半数の学生が回答している。次いで、c「教師になりたくなかったが、なりたと思った」(29%)は、注目されるべき結果である。b「教師になりたい気持ちは、変わらなかった」(6%)とあわせ、約8割の学生が教員志望であることがわかる。

実習という、実践体験によって、学生は、様々な子どもや教師と出会う。共に時間を過ごす過程で、喜び、発見し、考え、そして、やりがいのある職業だと実感しているようだ。これらの結果は、問3の「実習中の心に残った出来事」の内容が「子どもの表情や言葉」と圧倒的に多かったこととあわせ考えてみると、実習期間の4週間は、学生自身の進路決定に重要な意味を持つ時間であったといえよう。

一方、d「教師になりたくない気持ちは、変わらなかった」(8%)、さらに、わずかながらも、c「教師になりたかったが、薄らいだ」(3%)がみられた。その理由としては、問1-③でも述べたが、教師のあまりにも多忙な毎日に驚き、「自分はやっていけるだろうか」という不安や迷いが生じ、「もっと子どもと接する時間、一緒に遊ぶことのできる仕事がいい」という気持ちにつながったようだ。f「その他」(7%)では、「幼稚園教諭か小学校教諭か迷っている」等の記述が多く、図2の教員以外を志望した学生(19%)は、「小学校より、幼稚園の方が向いていると思った」「教育とは、関係のない企業で自分の力を試してみたい」「教師以外の職業で、子どもと遊んだりする仕事をみつけない」などの内容がみられた。

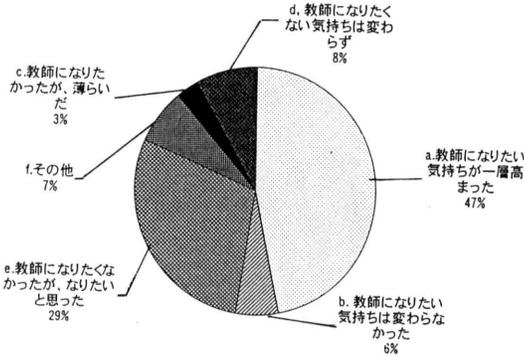


図4 実習後の意識(1)

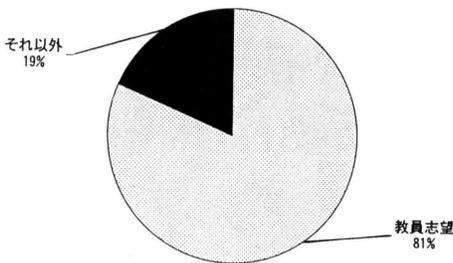


図5 実習後の意識(2)

6 実習指導への要望

無記入が多く、わずかながらの回答人数、内容は、「指導案の詳しい書き方をもっと取り入れてほしい」「板書、教室での声の出し方をもっと練習しておきたい」「ロールプレイングや話し合いの時間がもっとあればよかった」「先輩や後輩との懇談会をもっと持たかった」などである。実習前の指導では、教科教育法の授業と関連させ、模擬授業や参加型授業などを積極的に取り入れる工夫が必要であろう。

まとめと今後の課題

以上、過去3年間の学生を対象とした、小学校教育実習終了後のアンケート調査結果について述べてきた。

実践学習としての教育実習を体験した学生は、実に様々な感想を抱いてくる。子どもと関わる喜び、新たな発見、驚き、授業技術の未熟さ、難しさを感じとってきている。そして、教師という職業の社会的・倫理的な責任の重要さを痛感してくる。

全体的にみると、年度別ではその内容に大きな差はみられず、大半は教育実習を「子どもとのふれあいを通し

て感動することがたくさんあり、教育への意欲を高めた」ということに集約される。しかしながら、少数ではあるが、現実の小学校、教師というのは、想像していた以上に多忙であり、人間関係の狭さや授業の難しさから、教師への夢を断念、もしくは自信をなくしていく学生もいることは事実であった。いずれにせよ、教育実習は、その後の学生の生活や進路決定に何らかの影響を与えたものであり、自己発見につながるものであったといえよう。

感動的であった教育実習も、終われば、教師としての適性や能力の基礎が育成できたわけではない。実習で身に付けた資質をこれからどう生かしていくかが重要である。実習事後指導として、自己評価の作成や実習中の気付きや発見などのふりかえりが必要となるだろう。また、教育実習での実践研究を継続研究できるような方法を授業内容に取り入れていくことが望まれる。

より効果的な実習が行われるためには、大学での指導のみならず、実習校の協力が不可欠である。従来、本学学生の小学校教育実習は、東京都以外は、学生の母校に依頼している。3年次に内諾を得るが、大部分の小学校は「卒業生」ということで快諾してもらえる。現在まで約9割以上が母校での実習を終えている。しかし、最近では「中央教育審議会がまとめる教員養成・免許制度についての答申」では、「卒業生への評価の甘さ」、「同地区内の情報管理の面」からも母校実習を回避する動向がみられる。さらに、小学校側では、「児童・生徒の減少に伴う学校規模の縮小」や「経験の浅い教師の実習生指導力の問題」などの問題が生じている。今後の、大学での実習依頼システムが変化していくことは十分に考えられる。

最近では、大学教員養成カリキュラムの改定が提唱され、各大学では改善に向けての修正行われているが、一方、小学校教員養成の場合は、大学以外の方向へも展開し始めている。2004年度からは、「東京教師養成塾」や「杉並師範館」などの区市町独自の教員任用がみられる。ボランティア、チューターの導入など、教職に就く前からの実践的な指導力の育成が強く求められている。こういった状況のもとで、大学の教員養成がいかに、その役割を果たしていくかが問われている。新しい小学校教育に対応しうる学生すなわち教員をどのように育成していくべきかを明確にし、そのためのシステムが確立されることが重要である。当然ながら、「小学校教育実習指導」においても早急な課題となるのである。

参考文献

- 1) 柴田義松・木内剛「教育実習ハンドブック」
学文社 2004年 3月
- 2) 教師養成研究会 「教育実習の研究」
学芸図書 1991年 2月
- 3) 「東京都特別支援教育推進計画」
一人一人が輝く特別支援教育の創造をめざして
東京都教育委員会発行 2004年 11月
- 4) 日本教育新聞 (平成 18年 7月 3日 月曜日)

Summary

The students can realize how important teaching practice is. The students get to know this work has very good for teaching children and big influences to them.

Teaching practice would be a turning point to make decision on the occupation in future.

We would discuss the problems of teaching practice and etc at the school through the researching survey.